秋田南高校

「　探究的な学び　」

実　践　事　例　集

～　ＳＧＨ５年間の取組と成果　～

ＳＧＨ事業における「探究的な学び」を通して、
生徒たち、そして学校が大きく変わりました。
この冊子は、５年間の取組の概要と、
指導の際のポイントをまとめたものです。
「総合的な探究の時間」や、各教科等の授業における
探究的な学習活動に取り組まれる
先生方の参考になれば幸いです。

２０２０年３月

平成27年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール
秋田県立秋田南高等学校

ＳＧＨの取組
ー探究的な学びを通したグローバルリーダーの育成

本校は、平成27年度より文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）に指定され、探究的な学習活動を通してグローバルリーダーを育成するカリキュラム開発に取り組んできました。
その取組の概要とポイントを冊子にまとめました。

本校の取組

本校では、生徒がグローバルリーダーに必要な力を身に付けるため、生徒の探究的学習である課題研究と、教員による問題解決のための力を伸ばす授業研究という、２つの「探究的な学び」の事業を行うカリキュラムを開発しました。さらにこれらの事業を充実させるため、大学や地域の諸機関との連携の仕組みを構築しました。

グローバルリーダーの育成

課題研究「国際探究」

問題解決力育成授業研究

国内外の大学や研究機関との連携

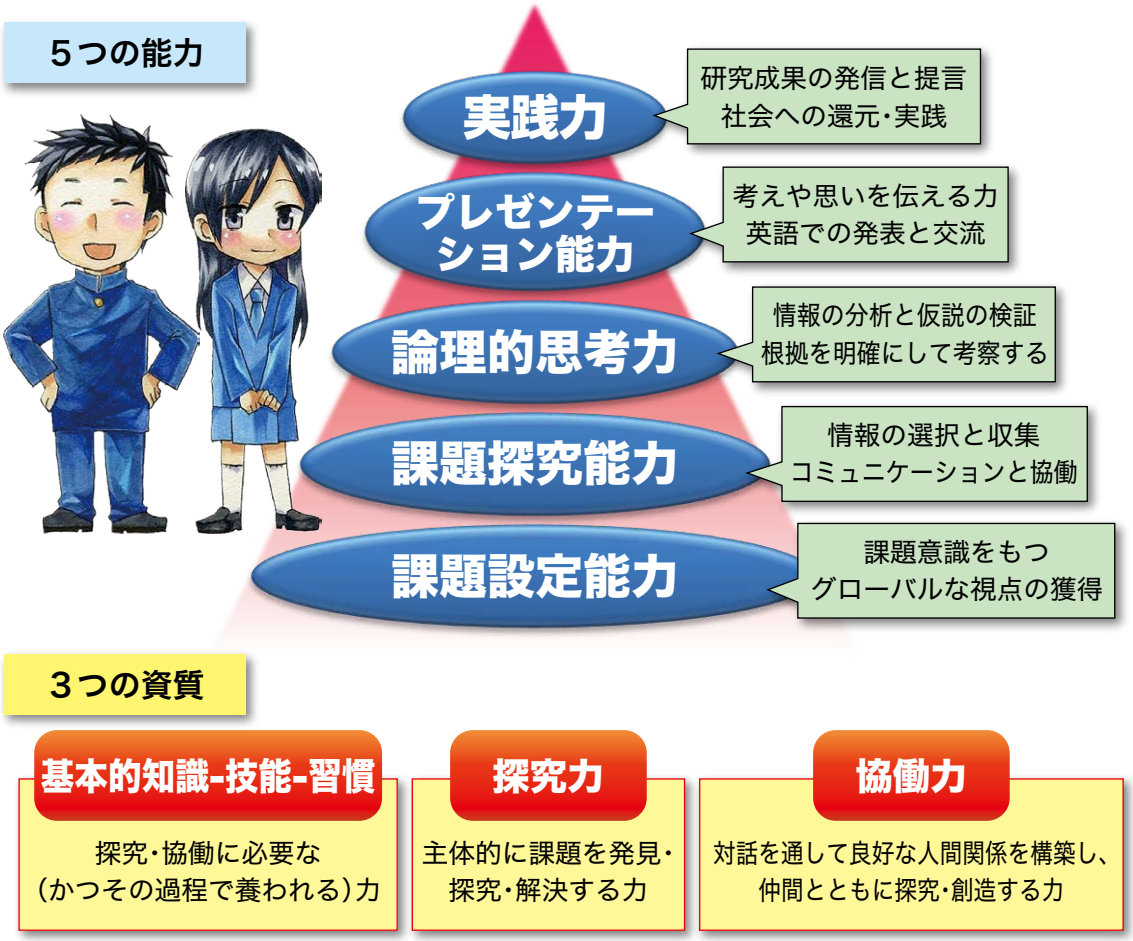
タイ
- Bangkok Christian College
- MahaSarakham Univ. Demonstration School
- Dara Academy

オーストラリア
- St.Brigid's Catholic College

国際教養大学
秋田県立大学
秋田大学
秋田県教育委員会

秋田経済研究所
ジェトロ秋田事務所
秋田市役所
秋田県庁
研究機関・NPO・企業等

どのような力を育てるか



本校が育成を目指すグローバルリーダーとは、グローバルな視点から世界と郷土を見つめ直し、それらの課題を論理的に考察し、解決策を考えるとともに、社会に向けて発信や提言をしていくことができる人間です。

そして、そのようなグローバルリーダーには、「基本的知識・技能・習慣」、「探究力」、「協働力」の３つの資質が求められ、具体的には、「課題設定能力」、「課題探究能力」、「論理的思考力」、「プレゼンテーション能力」、「実践力」の５つの能力を鍛える必要があると考えました。

これらの資質・能力を育成する手立てとして、

生徒の課題研究「国際探究」と、

教員の授業改善の取組「問題解決力育成授業研究」を行っています。

生徒の課題研究「国際探究」

学校設定科目として、週２単位を設定しました（３年生は前期のみ）。
１年生ではすべての生徒が履修します。
２・３年生からは選択履修となります。

高１
国際探究Ⅰ

ガイダンス
教養講座・専門講座
探究スキル講座
個人レポート作成
グループ編成
English Village
県内／海外フィールドワーク
プレゼンセミナー
成果発表交流会

高２
国際探究Ⅱ

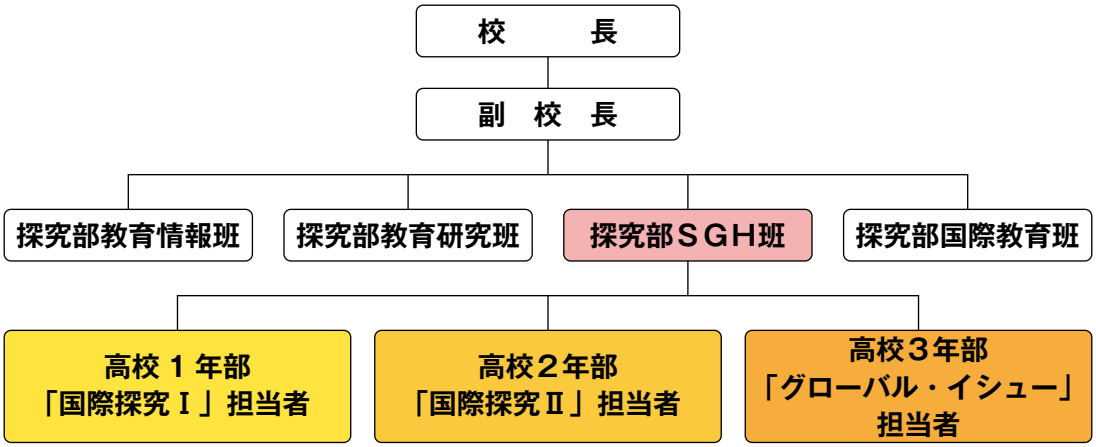
ガイダンス
グループ編成
大学教員との連携指導
English Seminar
班別フィールドワーク
プレゼン講座
校内／公開成果発表会
論文作成基礎講座
論文コンクール

高３
グローバル・イシュー

研究内容再検討
グローカル・ミーティング
国際意見交流会
論文完成

視野を広げ、グローバルな課題への理解を深めるため、多様な講師を招いて課外講座も多数実施しています

指導体制

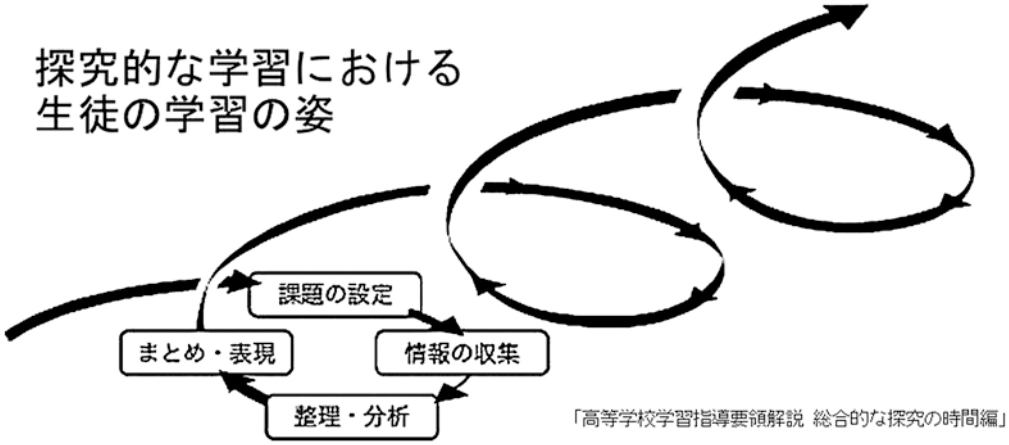


学校の分掌組織に、探究学習を担当する「探究部」を設置しています。

各学年の担当職員が所属しており、実際の活動の指導は学年部職員を中心に担当します。全生徒が履修する１年生は、学年部の全職員が担当し、２・３年生では、該当クラスの担任・副担任に加え、他クラスの副担任が指導に加わります。各学年とも、教員が自分の担当グループをもち、研究を指導します。

また、探究部教育研究班が授業研究を担当し、すべての職員が探究的な学習の推進に取り組んでいます。

探究的な学習の進め方



「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」

生徒が課題を設定し、課題に基づいて情報を集め、それらを整理・分析して課題の解決案を自分の意見としてまとめ、表現します。そして、そこから生まれた新たな疑問や、他の意見を基に、新たな課題を見出し、また探究に取り組んでいきます。

1 探究のゴールを知る

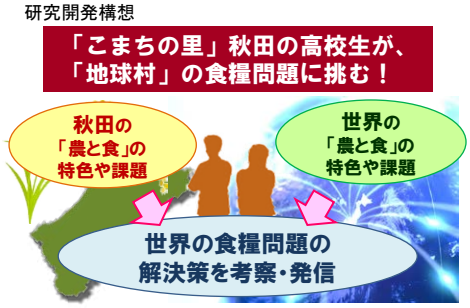
国際探究Ⅰ　ガイダンス・オリエンテーション合宿
国際探究Ⅱ　ガイダンス
グローバル・イシュー　ガイダンス

年度の最初に、ガイダンスを行います。活動のねらいや、年間の活動計画を示し、その中でどういう力を身に付けていくべきかを生徒に理解させ、活動の見通しをもたせます。

本校では探究活動のテーマを、「『こまちの里』秋田の高校生が、『地球村』の食糧問題に挑む！」と設定しました。地域や世界の現状や課題を調査・比較検討し、食糧問題というグローバルな課題の解決を目指すものになっています。「課題の解決策を提案する」というテーマとすることで、調べ学習で終わらない、目的をもった研究となります。

また、新入生には、４月１週目に、上級学年の優秀班の研究発表を、全校集会の形で見せています。活動を経て成長した先輩たちの姿を見ることで、目標を明確にもって探究学習に取り組むことができるようにしています。

研究開発構想



●活動のゴールを示す

毎時間の活動でも、最初に必ず「今日の活動のゴール」を示すようにします。
ねらいを明確にすることで、教師も生徒も見通しをもって、主体的に活動に取り組むことができます。

② 課題を知る

国際探究Ⅰ　教養講座・専門講座
国際探究Ⅱ　テーマ別研究推進検討会

本校のテーマで解決を目指す課題は、「世界の食糧問題」です。このテーマを身近なものとしてとらえてもらうために、特に１年生では、基礎的な知識とグローバルな視点を身に付けるための講座を多く設定しています。

外部講師として大学や地域のシンクタンクの研究者を招き、世界や地域の食や農の現状を学びます。入学直後の１年生には専門的な講義は難しいこともありますが、高校の教員がその後の指導に活用していくことで、後から学びを深めることができます。合わせて、大学など将来の学びの意欲につなげることもできます。

２年生では特に、大学教員と連携して、各グループに個別の指導の場を設定しています。それぞれのグループのテーマに合わせて、専門的な見地から助言や資料の紹介をしてもらっています。

専門講座は、選択制をとっています。２週にわたって６講座を実施し、１人で２つの講座を受講します。その後、４～５名のグループで、他の生徒に自分の受講した講座の内容を伝え合う時間を設けています。自分の学びの振り返りをするとともに、他の講座の内容にも触れることができるようにしています。

大学教員から食や農の現状について学びます

●質疑応答を通して主体性を育てる

講義や講演は、ともすれば生徒は受動的な活動になりがちですが、メモを取り、質問を考えながら受講するよう事前指導します。特に質疑応答に積極的に手を挙げるよう声掛けし、主体的に学ぶ姿勢を育てます。

③ 探究の手法を学ぶ

国際探究Ⅰ　探究スキル講座

１年生では、探究の手法を身に付けるための講座を、４～６月の早い時期に行っています。

■「協働力」講座

グループでの活動を進めるうえで、非言語的コミュニケーションの大切さや、自分の意見を論理的に主張すること、異なる意見を吟味して受け入れることの重要性を学びます。

■「課題設定能力」講座

さまざまな新聞記事からその背景となる問題が何かを考える活動を通して、課題発見の力を磨きます。

■「課題探究能力」講座

インターネットと図書館での文献調査の方法を学びます。スマートフォンやパソコンを使った検索実習や司書による講座を通して、文献検索の方法を身に付けています。

●教員もスキルアップ

スキル講座は、高校教員が担当します。探究部がマニュアルや指導案を作成し、指導法を教員に伝えます。
教員自身が講座を通して探究の手法を学び、その後の指導にも生かしていきます。

4 問いを立てる

国際探究Ⅰ　個人レポート作成・グループ編成・テーマ設定
国際探究Ⅱ　グループ編成・テーマ設定・テーマ別研究推進検討会
グローバル・イシュー　テーマ再検討

探究はグループでテーマを定めて行います。

グループは４～５名の構成とし、個々の希望する分野に基づいて教員が編成の原案を作成します。その上で生徒同士でディスカッションし、グループ内で方向性を共有できるか検討します。場合によっては、適宜他グループと話し合って調整することもあるため、広い教室で自由に移動しながら活動するようにしています。

グループ編成ができたら、担当教員も配置します。教員１人当たり２～３グループ程度が適切ですが、難しい場合は、担当グループの考えや進捗状況を把握しやすくする指導の工夫をします（毎時間のワークシート提出など）。

研究テーマは、グループで話し合って決定していきます。個人の希望を班員同士ですり合わせなければならず、この活動には時間をかけています。探究学習の成否の半分はここで決まってくると言えます。

テーマの立て方は、各種講座を経て見いだした世界の食糧問題について、どういう課題があるかを探すところから始まります。どこで、誰が、何に困っているのか、問題の所在を明確にします。そして、その要因は何かを調査し、どうすれば解決できるかを考察して、解決策の仮説を立てることになります。２年生では、この活動に大学教員に助言をもらい、より専門性と実現性を高めた研究を目指しています。

●テーマは生徒自身の中から作らせる

グループ編成とテーマ設定においては、できるだけ生徒の希望を確認しながら進めます。特にテーマは、生徒自身で設定することが大事です。自分自身から出た「問い」をであればこそ、主体的に探究を続けていくモチベーションにつながります。

●教科の学びとのつながり

グローバルな課題をテーマとするにあたり、その課題の背景にはどういうことがあるのかを考えさせることが大切です。多くの場合、課題は複数の問題が関連し合って発生しており、その際、各教科で学んだこととも関連付けて、課題と背景の因果関係に気づかせます。そこから新たな気づきや学びのきっかけが生まれ、新たな教科の学びにもつながるよう、働きかけていきます。

5 調査活動

国際探究Ⅰ　県内フィールドワーク・海外フィールドワーク
国際探究Ⅱ　班別フィールドワーク

課題について背景や要因を深く掘り下げ、解決に向けた仮説の検証のために、実地調査を行います。課題について自分の目で見て確かめること、地域の社会人との対話を通して身をもって知ることを重視しています。

調査先は、県内各地の企業や行政機関、大学、研究機関など。高１では貸し切りバスで広範囲に調査活動を行います。高２では、各自で調査計画を立て、夏休み期間中に公共交通機関を用いて訪問します。

訪問先は、過去の訪問実績なども参考にしながら、生徒自身が設定します。電話でのアポイントメントも生徒たちが行い、訪問計画、質問事項なども事前にワークシートにまとめて準備します。

１年生では、20名の選抜生徒がタイを訪問する海外フィールドワークも行っています。現地では各グループのテーマに沿って、交流校や市場などでの調査活動を行うほか、国際機関や企業を訪問し、視察やインタビュー調査を行います。

タイでの市場調査

●事前・事後の指導

単なる見学や視察に終わらないようにするには、事前・事後の指導が重要です。
訪問先の業務内容や、関連分野について事前に調べておくことはもちろんですが、フィールドワーク前には、予め調査結果について予想（仮説）を立て、調査後に検証するという姿勢が大切になります。

6 分析・考察

国際探究Ⅰ　国際探究Ⅱ　グローバル・イシュー　**グループ別研究活動**

グループテーマについて、フィールドワークや文献調査で分かったことやアンケート等で得たデータの分析を行い、仮説の検証を行います。説得力ある解決策を提案するために、根拠（エビデンス）を示せるようにします。グループでの話合いや作業の分担といった協働的な活動が多くなります。

２年生は大学教員の助言をもらいながら進めます。大学教員が来校できないときには、メールやクラウドサービスClassiを活用して研究の進捗状況を伝えたり、文献や資料を紹介してもらったりします。時にはSkypeを使って報告や助言をもらう場合もあります。

黒板を使って思考を整理

担当教員のアドバイス

●思考の可視化と共有化

活動の際には適宜ワークシートを用いて、自分たちの研究の全体像や進捗状況等を明確化させます。グループ内で考えを共有しながら議論を進める上で有効です。

発表準備シート

7 成果発表

国際探究Ⅰ　**成果発表交流会**
国際探究Ⅱ　**校内／公開成果発表会**

１年生では２月末に、２年生では10月末に成果発表会を開催し、下級生や保護者、大学教員や連携機関等の方々に対して研究成果を口頭発表する機会を設けています。

校内あるいはクラス内にて中間発表会を行い、代表に選出されたグループがステージでの公開発表を行います。特に２年生は公共ホールでの英語発表としています（１年生は日本語・英語から選択可）。堂々としたプレゼンテーションは、来場者から高い評価をいただいています。

プレゼンテーションを作成するにあたっては、外部講師による全体向けの講座（１年生）や、グループごとの個別指導（１年生代表班および２年生全班）を行っています。

公共ホールでの発表

身振り手振りを交え、堂々と発表

●プレゼンテーションの指導

自分たちの主張や考えが、聞き手に伝わるにはどうすれば良いか、徹底して追究させます。聴衆を引き付ける話し方、主張に説得力を持たせる資料の提示方法などの視点を与えることで、生徒たちは、TED等の映像も参考にしながら、自分たちで工夫して多彩な表現方法を編みだしていきます。
また、中間発表会など、繰り返し発表の機会を設定することを大切にしています。生徒同士の相互評価や教師・外部講師の指導を受けて、生徒のプレゼンテーション能力は飛躍的に高まります。

8 研究論文作成

国際探究Ⅱ　論文作成基礎講座・論文コンクール
グローバル・イシュー　論文構成検討・論文完成

２・３年生では、研究成果をまとめた成果物として、研究論文を作成します。主にパソコンを使って作成することになりますが、本校の場合、一人一台ずつは機材を確保できないこともあり、週末や冬休みの期間に各自で書いた原稿を、後からつなぎ合わせて完成させることになります。校時内の活動は、そうしたグループでの協働の時間になります。

また、高校生にとって学術的な文章を書くのは初めてということがほとんどであり、ハードルが高いものです。章立てなど研究論文のフォーマットは予め教師側で用意しています。ただし、引用や参考文献を示すことの重要性については、探究スキル講座など探究の初期段階で扱っており、また、フィールドワークや文献調査の際にも、記録を残すことを指導しています。論文作成は、これらの学びを振り返りながら進めていくことになります。

完成した論文は、大学教員に評価していただき、優れたものを論文コンクールという形で表彰しています。プレゼン発表とは違った結果となることも多く、どちらかというと地道な執筆作業が続くなかでも生徒のモチベーションを高めながら、研究の質を向上させることにつながっています。

●成果物として公開する

完成した論文は、一冊の論文集にまとめ、学校図書館に所蔵するほか、ＰＤＦファイルの形で学校ホームページでも公開します。学術誌掲載とまではいきませんが、後輩たちの研究にも資するものになることを期待しています。

完成した研究論文

9 実践・発信活動

グローバル・イシュー　グローカル・ミーティング、国際意見交流会

研究の最終年度となる３年生の最大の活動は、地域社会や世界に向けての発信と、実践です。秋田市役所の職員や、地域の起業家など社会人の方々に向けて、自分たちの探究内容を伝え、研究成果の社会への還元を図るとともに、意見交換を行います。そして、この活動で得た新たな知見や気付きを研究に活かし、最終成果物として研究論文を完成させます。

この活動を通して、生徒たちは研究と実社会の関わりを理解するとともに、地域や社会について知り、社会参画の意識を高めていきます。この活動をきっかけに、主体的に地域の行事やイベント等に参加する生徒も出てくるようになりました。

また、本校の留学生（短期・長期）とも、意見交換の機会を設けています。異なる背景や価値観をもった同世代の留学生たちからの意見や感想をもらい、視野が広がることにつながります。

●地域に根ざした活動

地域社会と関わる活動を探究の中に位置付けることで、探究学習にキャリア教育の視点を盛り込むことが出来ます。地域で活躍する社会人の方々の姿に、働く意義を見いだすとともに、地域の魅力を再発見することにもつながっているようです。グローバルな視点をもたせるとともに、ローカルを意識させることを大切にしています。

市役所を訪問しての意見交換

企業人の視点に刺激を受ける

留学生と英語でディスカッション

英語コミュニケーション能力向上に向けた取組

本校では２年生の成果発表会において全グループに英語発表と英語での質疑応答を設定しています。英語をツールとして用いることを意識し、英語コミュニケーション能力向上に向けた多様な取組を行っています。

国際教養大学との連携による English Village

１年生の希望者約30名を対象として、国際教養大学の大学生・大学院生・留学生らが運営する２泊３日のプログラムに参加しています。英語でのプレゼンテーションを最終目標としてさまざまな活動を行います。英語力のみならず、多様なコミュニケーション能力の伸長が見られます。同大に進学した本校卒業生にはスタッフとして参加している人もいます。

県内各校ＡＬＴの協力による English Seminar

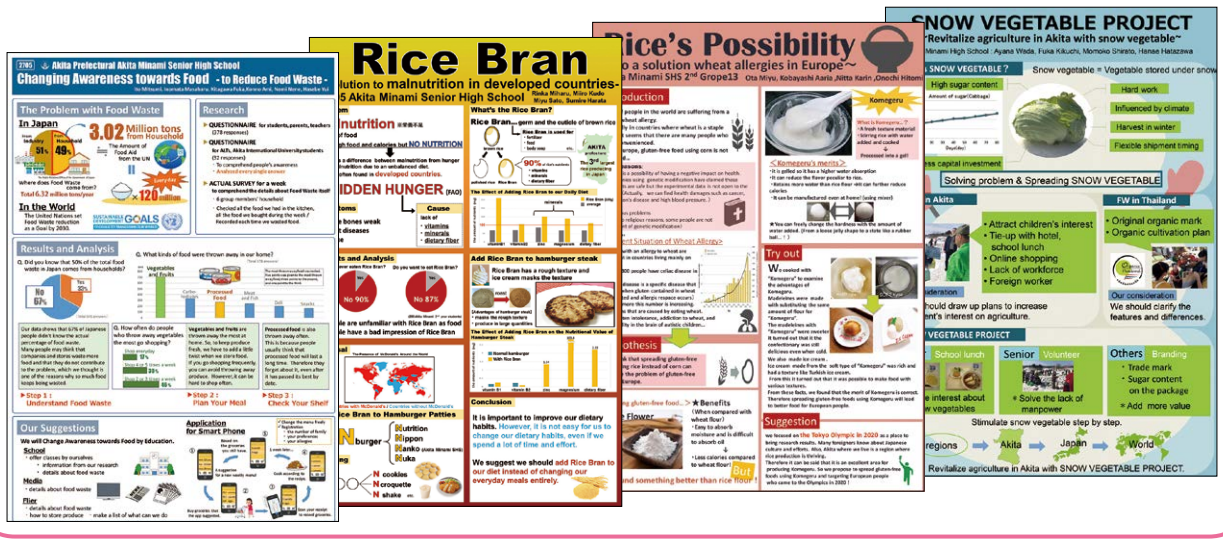
２年生ではＳＧＨクラス全員を対象に、本校にて週末を利用した２日間英語漬けのプログラムを行っています。講師には県内各校のＡＬＴを招き、県内大学に通う本校卒業生もアシスタントとして参加します。英語を使った活動を楽しく行いながら、多様な文化や価値観を学ぶグローバル講座となっています。

海外連携校との連携による Skype交流

１年生の希望生徒を対象として、放課後や昼休みに、タイの高校や中学校とSkypeを用いて英語で交流しています。タイでは日本語や日本文化を学ぶクラスもあり、日本語での交流も行っています。海外フィールドワークや海外研修等で交流した生徒と画面越しに再会することもあり、重要な国際交流の機会となっています。

英語ポスター作成

研究成果をまとめる方法のひとつとして、研究ポスターがあります。本校では、２年生の公開成果発表会の際に、代表発表を行わないグループが英語で作成することとしています。ポスターでよく使用する言い回しや表現を一覧にして配付したり、各グループのポスターを一斉に掲示して互いに英語の使い方をチェックし合ったりして、英語表現力向上に活用しています。



校外の発表会やコンテスト等の活用

近年、課題研究を行っている高校生を対象とした発表会やコンテストが数多く開催されています。こうした外部発表会に、本校では、１・２年生の成果発表会の上位入賞チームを派遣しています。

２年生の最優秀グループには、関西学院大学などが主催する「探究甲子園（旧ＳＧＨ甲子園）」に応募する権利が与えられます。本校のＳＧＨ指定一期生のグループは、この発表会に出場して最優秀賞を受賞しました。さらに招待出場となった「グローバル・リンク・シンガポール」でも最高賞を受賞しました。こうした先輩たちの活躍もあって、これらの外部発表会の存在は、生徒たちの探究への意欲や活動の質を高めることにつながっています。

また、探究的な学びに楽しさややりがいを見いだした生徒も多く、多様な課外活動にチャレンジするケースも増えてきています。このような課外活動に取り組んだ生徒の中には、教科の学習への関心に結びつけたり、卒業後の大学での学びにつなげたりした生徒も見られました。これらの実績はＡＯ入試での提出資料や面接の話題として、大いに活用されています。

地域のイベントで発信活動を行い、ラジオの取材を受ける

アーツセンターあきた主催の「クリエイティブキャンプ」での実践活動

秋田ユネスコ協会主催「ユースセミナー」で提案を発信

自主的な実践活動への発展

２・３年生の中には、探究的な学習で取り組んだ課題の解決策を地域社会において、あるいはＳＮＳ等を活用して、自主的に実践に移すグループが出てくるようになりました。

例えば、秋田の農業活性化を掲げたグループが、校内で参加者を呼びかけて援農ボランティアを行ったり、農家の方々と意見交換会を開催したりして、提案の実現に向けた取組を進めました。また、食品ロスの削減を研究したグループは、啓蒙活動として中学生への出前授業を行ったほか、地域イベントでも発信活動を行いました。ほかにも、栄養問題に対する米ぬかハンバーグの提案を行ったグループは商品化を目指した活動を進めました。これらの実践活動は、マスコミでも取り上げられたほか、市役所にポスターが掲示されたり、消費者庁主催のシンポジウムに招かれたりといった発展を見せました。

一方で、このような活動は、生徒の負担となることも考えられます。探究的な学習を進めていくと、新たな疑問や関心が出てきて、どんどん学びを深めていくことになり、終わりがありません。教科の学習や部活動など学校生活とのバランスを取りながら、生徒が探究活動に意欲的に取り組めるよう、教師が生徒の動きを把握しておくようにするとともに、学校全体の動きを見通してカリキュラムを編成していく必要があるでしょう。

教員の授業研究「問題解決力育成授業研究」

新学習指導要領では、新しい時代に必要となる資質・能力を、「生きて働く知識・技能」、「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等」、「学びを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力、人間性等」と位置付けています。これらの資質・能力は、前述した本校で育てたいグローバルリーダーに必要な３資質と５能力と重なります（p.2）。本校では、カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえ、教科の授業においてもこれらの資質・能力を育てることを目指し、そのための授業改善の研究を「問題解決力育成授業研究」と呼び、その推進に取り組んでいます。

「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて　～頭の中をアクティブに～

前述の資質・能力をどのように学ぶか、という観点から、本校の授業研究では、「アクティブラーニング」、すなわち「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善に取り組んできました。

職員研修を重ねる中で、本校としてのアクティブラーニング像を考えてみました。教科の特性によって授業のねらいや形態は異なりますが、教員間で共通理解を持って授業作りを進めることとしたのです。以下は、教員同士のディスカッションからキーワードを出し合って作り上げた、秋田南高校のアクティブラーニング像です。

教師も協働で考える

> 教師が生徒の学ぶ意欲を喚起し、生徒同士の協働性を活かした主体的な活動を通じて、生徒自らが知識・技能を基盤として課題を発見し、思考を深め、判断し、自分の考えを表現するという過程や、その過程の繰り返しを重視した、頭脳の活性化が促進されている生徒の学習の在り方（またそのように導く教師の指導の在り方）。

特定の指導法や授業スタイルを定めるのではなく、「生徒の頭の中がアクティブになるような授業」であるべきだと考えました。そして、各教科において、この考え方に基づいて各教科で授業作りを進め、中等部・高校ともに公開授業研究会を実施して、多様な授業実践を公開しました。以下に、それらの授業のポイントを紹介します。なお、それぞれの授業の学習指導案・協議録は各年度のＳＧＨ研究報告書に掲載しており、本校ホームページにて公開しています。

多様な授業実践

■ 生徒自身が問いを見いだす課題の設定

・**複数の資料の比較**（H28・高１国語総合）

新聞の社説を用いた授業。異なる主張の２紙を比較させ、生徒自身に主張の違いに気付かせる課題を設定しました。生徒が気付きの中から問いをもつよう意図的な比較の場面を設けています。

・**生徒自身が資料から課題を発見**（H30・中１社会）

グラフから課題を読み取らせ、「なぜ、ブラジルの熱帯林の消失が減らないのだろうか」という学習課題を生徒自身が設定する導入としました。自らの問いから授業が始まることで、主体的な学びになっていきます。

比較から気付きを導く

■ 協働的・対話的な活動を通して、考えを深める

・対話を促す活動場面の工夫（H30・高１生物基礎）

知識構成型ジグソー法を用いて、４つの異なる資料を４人の生徒が分担して読み取り、グループで結論を導き出す活動として、対話が必要な場面を設定しました。複数の資料の読み取りから新たな発見や気付きが生まれていました。

生徒同士が教え合う

・グループ全員が解法を理解できるように教え合う（H30・高１数学Ⅰ）

空間図形の問題の解き方を、理解している生徒とつまずいている生徒を事前にグルーピングし、教え合う活動を取り入れました。生徒同士の活動としたことで、個別指導で全生徒の理解につなげることができ、また、教える側の生徒にとっても理解と定着が深まりました。

■ 多様な発表の機会を設け、表現力を伸ばす

・スピーチ発表を相互に評価し合う（H30・中１J.E.Communication）

新聞記事から読み取ったことを互いにスピーチし合う場面に、相互に助言し合ったり、タブレットで撮影して課題点を確認し合ったりする活動を取り入れました。ワークシートに助言を記入する欄を設け、伝え合うことを通じて、学びが深まる活動になりました。

発表を相互評価

・ホワイトボードを用いて記述を練り上げる（R1・高２地理Ｂ）

論述問題について、個人の解答をグループで検討し合い、ホワイトボードを用いてより良い解答を練り上げる活動を設定しました。他の意見を取り入れながら思考を重ね、自分たちの解答を吟味し合うことで、表現力の高まりが見られました。

ＩＣＴの活用事例

探究的な学習活動とＩＣＴは親和性が高く、本校では協働的な場面などに積極的に活用しています。

- プロジェクターを用いて板書や資料を素早く提示する。
- 生徒の書いた図やグラフを教師がデジカメやスマートフォンで撮影し、プロジェクターで投影することで即時に全体に共有する。
- タブレットに高解像度の図版資料を入れ、自由に拡大・縮小しながら図像読解させ、多様な気付きを引き出す。
- クラウドサービスClassiを活用して、事前に家庭学習として必要な資料を与えたり、動画で説明を確認させたりしておき、授業で活動時間を確保する反転学習を行う。
- 生徒の考えをスマートフォンからClassiにアップさせ、グループで共有して議論する。プロジェクターで全体にも共有する。

タブレットの活用場面

探究的な学習の指導のポイント

① ゴールを明確化する

探究的な学習は多様な活動です。効果的に進めるには、活動を通してどのような力をつけるのか、今日の到達点はどういう姿なのか、長期的・短期的なねらいを絞って、ゴールを生徒に示しながら進めることが大切です。研究テーマも、「○○について」という漠然としたものではなく、「○○を△△することで××する」といった仮説検証型の研究とすることで、目的とやるべきことがはっきりします。生徒も教員も見通しをもって活動できるようになります。また、探究の終盤には成果発表の場を必ず設定します。できれば、外部から来客を招いたり、公共のホールで開催したりするなど、活躍のステージを用意することで、生徒の目標となり、探究に向かう意欲向上に寄与するはずです。

② 対話を通して主体性と論理的思考力を磨く

生徒が探究を深めるためには、主体性をもって取り組ませることが重要です。そのため、教師はできるだけ「指示役」ではなく、「聞き役」に回ります。どんなテーマで、何を目指して活動するのか、生徒に語らせる（あるいは書かせる）ことで、生徒は思考が整理され、研究が具体的になり、方向性が定まります。また、教師が対話を通して「何が原因なの？」、「そのメリットは何？」などと質問し、論拠が不十分なところには「ツッコミ」を入れることで、生徒は根拠をもって主張するようになり、論理性の向上と、探究の質の高まりが期待されます。

③ 地域社会との関わりを探究の中に位置付ける

変化の激しい時代において、社会のさまざまな課題を解決できる人材を育てていく上で、学校外の世界と関わり、外に出て行く場面を設けることが効果的であると考えています。地域の課題に触れるだけでなく、地元で活躍している方々の取組など、改めて地域のよさを知ることにもつながります。探究学習においては、外部講師による特別講座、フィールドワーク、実践・発信活動など、多くの場面が考えられます。外部との折衝やカリキュラム構築は教員にはハードルが高そうに感じるかもしれませんが、大学や行政機関、企業、ＮＰＯなど地域の方々は学校教育に非常に協力的です。地域に根ざしたキャリア教育や、社会に開かれた教育課程の実現につながるはずです。

④ 探究的な学習を、学校全体の教育活動に活かす

本校では、ＳＧＨ事業の探究的な学びの取組が、学校全体の取組に広がっています。各教科の授業はもちろん、クラス経営や部活動での指導などにも、生徒の主体性を引き出すアプローチがあったり、協働的な場面を作ったりといった仕掛けがあちこちに見られるようになりました。本校で育てたい３資質・５能力について、学校の教育活動全体で一貫して育てる意識が根付いてきているといえます。こうしたカリキュラムマネジメントの視点を核にした学校づくりは、新学習指導要領でも求められているところです。先に「ゴールの明確化」の重要性を挙げましたが、探究的な学習のゴールやテーマは、こうした「育てたい生徒像・目指す学校像」に基づいて設定することが重要となります。

秋田南高校のこれからの取組

ＳＧＨ指定終了後は、すべての生徒が「総合的な探究の時間」に探究的な学習を進めます。
特に、２年生からは２コースに分かれる形として、多様な探究に取り組むこととしています。

高1

国際探究
- ＳＤＧｓをテーマとしたグループ研究。
- 探究活動のサイクルを通して、探究のスキルを習得。

（高２進級時に、コースを選択）

高2・高3

学術探究コース
- 高い進路目標を持った生徒が対象（１クラス選抜）。
- グローバルな社会課題や幅広い自然科学がテーマのグループ研究。
- 大学との連携指導。
- フィールドワークツアーの実施。
- 英語発表と研究論文の執筆。

総合探究コース
- 文理５クラスが対象。
- 将来学びたい学問分野がテーマの個人研究。
- 共通の学問分野を学ぶ生徒が一緒に活動し、協働で探究を深める。
- 研究レポートの作成。

卒業生の言葉

ＳＧＨの経験が、今の自分を支えてくれている

原田　雄生 さん （2018年３月卒・アメリカ・デポー大学２年）

３年間のＳＧＨの活動を通して、人前で話す機会をたくさん与えていただきました。その経験を通して、英語運用能力やプレゼンテーションスキルの向上を図ることができただけではなく、人に何かを伝え、納得してもらうことの喜びや、公の場で発言することの責任の重さを学ぶことができました。特に、横浜でのＳＧＨ全国高校生フォーラムにおいて全国の代表生徒と壇上でディスカッションした経験は忘れられません。私は今、アメリカの大学で学んでいます。ＳＧＨの経験が、今の挑戦につながっていると感じています。この恵まれたＳＧＨという環境を提供してくださった政府や先生方、そして共に切磋琢磨してきた友人たちには心から感謝しています。

「国際探究」を通して培った力

能美　寧々 さん （2019年３月卒・東北大学法学部１年）

私は、秋田南高校での「国際探究」の活動を通して、グローバルな視点を養うことができました。大学入学後も、グローバルリーダー育成のための授業を履修したり、留学生を支援するサークルに参加したりして、国際感覚を磨いています。最近では、大学の短期プログラムを利用してスペインへ海外研修に行きました。ＳＧＨの経験が海外への関心を高めるきっかけとなり、現在の自分につながっていると感じています。それだけでなく、国際探究の活動は、自己表現能力や論理的思考力の向上にもつながったと思います。国際探究の活動を通して培った力を今後も伸ばしていきたいです。

秋田県立秋田南高等学校
Akita Minami Senior High School

〒010-1437　秋田市仁井田緑町４－１
Tel 018-833-7431 Fax 018-833-7432
E-Mail akitaminami-h@akita-pref.ed.jp
Web http://akitaminami-h.wixsite.com/akitaminami